

ワンルーム二十四節氣

名古屋市立桜台高等学校 二年

服部 貴実子

夏。

ゴウンゴウン。遠くで換気扇の重たい稼働音が聞こえる。俺は畳に右耳をくつつけた。音はそこから漏れてくる。

それもそのはず、このワンルームの下はラーメン屋になっている。雰囲気のある店内、地域密着型、創業三十年の変わらぬ味。いろんな言い方はあれど、つまりオンボロで不景気なのだ。それでも毎夕暖簾を掛けて、換気扇を回す。おかげさまで窓を開ければ即ラーメンの気分になる。

右の頬を掻きむしる。日に焼けた畳はかさついている。薄いカーテンを貫通して、夕日が日々焼いてきた畳を今日も焼く。その夕日の黄金色の見事な輝きといたら。薄い布団も剥がれかけの壁紙も、何から何まで金一色に染め上げる。俺一人を残して。

畳に寝転がって天井を見上げた。イヤホンを突っ込んだ両耳が痛い。しかしこうでもしなければ、耳の穴から脳味噌が零れ出てしまいそうだ。

ぼんやりすると、不意に過去の名残が頭蓋骨の中を占めてしまう。剰余の定理ってなんだっけ。アショールカ王って誰だっけ。今って何限目だろう。全て終わったことなのに。

開いた窓から夕焼けに溶けて豚骨スープの香りが広がる。掃除の行き届いていない床の上で、こっそり糸と野菜ジュースの甘さが混じり合う。悪臭だ。俺はベランダに逃げ込む。

片足だけのサンダルを履いて、片耳だけイヤホンを付ける。そうして俺はしみじみと、自分が不完全だと思ひ知る。

かび臭い室内は籠だ。一匹の亡霊のために、両親の用意したケージ。失敗した俺はここに押し込められた。餌は自作の殻入りハムエッグ。もっと料理が上手になりたい。

スマホを取り出して電源を付ける。無機質な液晶画面が四時五八分を映し出す。火曜日は近所のスーパーの特売日。今すぐ出かければタイムセールに間に合うはずだ。

行こう、と決めてからたつぷり二十分を要して俺はワンルームを後にした。もちろん化粧もドレスアップもなかった。せいぜいだるだるの部屋着から皺の寄ったシャツに着替えたくらいだ。どうして畳から起き上がるだけで十九分も使うのだろう。

重たいドアに肩をぶつけて押し開ける。むっとする熱気が体中に纏わり付いた。向かいの家々の屋根が太陽光を反射して、俺の網膜を貫く。俺をこの檻に押し止めようとする。

眩む視界を振り切って、足早に階段を降りた。用水路を左手に坂道を下る。アパートは急な勾配の坂道の中腹、駅から遠い所に建っている。それも安さの秘訣か。

足元の小石を蹴った。石は高い音を立てて熱されたアスファルトを転がる。それを二度三度と繰り返したところで、ぽちんと音を立てて用水路に落ちた。上手くないかない。

信じられないかもしれないけど、今、まだ六月なんだから。太陽は「今が人生の盛り」って顔をあと三ヶ月もするつもりなんだ。しかも来年もする。再来年も。そのまた次も。俺の盛りはたったの二ヶ月間だったよ、ちくしょう。

家を出てから最初の信号機に捕まった。剥き出しの両腕がじりじりと焼けつく。道路を挟んだ反対の道から数人の高校生が歩いてくる。肩を小突き合って、へらへらと笑う。

俺にとって、彼らはコウコウ星から来た宇宙人だ。それぞれが内に隠しい青春の炎を宿している。そりゃあ煌々と光ることでしょう。

健康的な肌色に満面の笑み。揃いのジャージにでかでか高校名まで背負っている。鮮烈な赤色が西日に照らされてゆらゆらと燃える。

炎は道路を飛び越えて俺まで届く。降り注ぐ太陽さえもが加担する。俺を焼き殺す。

彼らの、ジャージとか部活バッグとかを見ていたら、俺はもう家に向かって歩いてた。逃げ帰る俺の背に『敗走』の烙印が押される。

この辺りは駅前の喧騒から一步身を引いた地域だ。穏やかな休日をごす人のための場所。どこの家にも庭があり、窓にかかるカーテンはレース。庭先に駐車してあるマイカーは『健康的な暮らし』の象徴だ。再度並走する用水路を挟んで、住宅街の反対には個人商店が軒を連ねる。駅があるのもそっち。だから俺はこの用水路を越えられない。ずっとこっち側の人間なんだ。

だからさ、こんなこと、気にする必要ないじゃないか。そうだろ。また一步、失敗作の欠陥が見つかっただけだ。

頭の中に空っぽの冷蔵庫の映像が映し出された。今晚もコンビニ弁当だ。

そうさ、俺はあのスカスカのメンチカツを愛してるのさ。

秋。

十月になって、金木犀は太陽を打ち倒した。今という浮世の春を謳歌している。秋だけ。

俺は毎日起床した瞬間から鼻が捻じ曲がる気持ちだ。どうして日本人は庭にシユールストレミングを植えるのか。あの甘さは、正直、気持ち悪い。

朝から畳に寝転がって空を見上げる。鱗雲が張り巡らされた丸い空。柔らかな風が吹き抜けて、ワンルームはしんと静寂に沈み込む。

夏中埃っぽかった部屋は風にすっかり洗われてしまった。開け放たれた窓からは何でも侵入する。秋風に羽虫に子供のわめく声。

「もう時間ないって。早くお片付けして！」

「やあだあ！」

「早くしてよ。ケンちゃん、ママは待ってるんだよ」

「行かなあーい！」

壁一枚隔てた隣の角部屋で、よくある日常の一コマが進行する。もうかれこれ二十分は続く、行く行かないの押し問答。薄い壁は親子のプライバシーを守ってくれない。

「ちゃんと学校行けないなら、もう凶鑑買ってあげないからねっ」

鶴の一声でぴたりと駄々が止んだ。どうやら隣の子供は未来の学者らしい。

そんな未来の学者先生と、アパートの廊下でばったりと遭遇した。俺は散歩帰りだった。一方で学者先生は学校帰りらしく、黒いランドセル

が横に控えている。前髪はぎざぎざ、服はだぼだぼ。自分の部屋の前で床を見つめている。母親の帰宅でも待っているのだろうか。

声もかけずに俺は自室のドアノブに飛び付いた。学者先生は見たところ小学生くらいだ。彼だって二十歳の不審者に声をかけられたくはないだろう。

「あおき、おじさんさ」

学者先生はほつんと言葉を滴らせた。ぎよつとして振り返る。古びたアパートの廊下に学者は居らず、ただ一人の少年が膝を抱えていた。

塗装の剥げた廊下に強く風が吹き付ける。まだ蛍光灯の付いていない夕方の出来事だった。急に廊下の材質が硬く感じた。彼の視線は地べたをよるめく蟻に注がれている。

「蟻ってなんで列になるか、知ってる？」

俺は頑として口を結んだ。少年はそんな様子も意に介さず、じつと蟻を見つめ続ける。

空には暗雲が渦巻いて、千切れた雲は素早い風に運ばれていく。

「迷わず、皆で行くためなんだよ。巢からご飯の場所まで」

つまり、『皆で』動かなければ生きていられないって訳だ。まるで人間のような。俺ではないようだ。

「でもさ、そんなことしなくてもいいのにね」

俺の心を読んだように少年は呟く。

え、と堪らず俺は聞き返した。喉からは掠れ声しか絞り出せなかった。階段に靴音が響き渡った。

「ママっ！」

少年は立ち上がる。その勢いに押されて俺はようやく自室に逃げ込んだ。ドアに鍵を掛けてチェーンを通して、それでも安堵は訪れない。ずる

ずると三和土に座り込む。心臓が暴れ回る。

背中越しのドアから親子の声が突き抜けてくる。甲高い会話は互いに絡まり合う。煩い。頭の中が黒のクレヨンでぐちゃぐちゃに塗り潰される。やめてくれ。手元でスマホが鳴り出す。俺に追い打ちをかける。ディスプレイに『母さん』の文字。俺はトイレに駆け込んだ。

便器に顔を突っ込んで、嘔吐しながら俺は泣いた。吐いても吐いても胃液の一滴も出ず、ただ涙だけが流れた。

その晩は酷い豪雨となった。雨は夜の十二時を過ぎた頃からますます勢いを増す。ボロいアパートのトタン屋根に轟音となって雨が打ちつける。

雨の猛攻が止んだのは翌日の明け方だった。

もう、室内に甘い香はしない。きつとアパート裏の駐車場では地べたの塵となっているのだろう。

ふいに金木犀のあの香りが懐かしくなった。

冬。

布団から出るのが辛い。眠れる訳でもないのに、まだきつく目を瞑っていたい。人生のサイクルが壊れてから、もう何を壊すのも恐ろしくなくなった。

しかし今日は起きなければならぬ。俺は唸りながら立ち上がる。廊下に置いたゴミ袋を掴み、ドアを開ける。くそ、何でこの地域はこの辺りの区域はゴミ回収の時間が早いんだ。

瞬間、空っ風が吹き込む。反射的に息を止めた。寒風が服さえ貫いて肌を撫でる。心臓がぎゅうと動く。

このアパートの住民は総じて朝に弱い。と勝手に俺は思っている。

アパートはラーメン屋の上に二階、横に四部屋の計八部屋。このワンルームで二人暮らしとか物理的に不可能だから、住民は全員で八人だ。そう、こんなボロ家のくせに全室埋まっている。ここは終末世界か。

彼らは朝に弱い。そして夜に生きている。明け方にうっかり人とすれ違えば、たいていその妙年の女性はケバケバしい色味のドレスを着ていたり、黄色い歯の欠けた口でうっそりと笑ったりする。

昼間に外を歩けない住人のためでは決していないだろうけれど、階下のラーメン屋は日が暮れてから営業する。閉店は日が昇る頃。もしかして店主も夜しか生きられない人種なのだろうか。

とんでもない檻だ。ワゴンの売れ残りだけが集められて、このボロ屋に詰め込まれている。

ブルルルルルル。ブルルルルルル。

家に帰ったら電話が鳴っていた。スマホを手取る。液晶画面に『母』の文字。

「……なんだよ」

『何だよ、って。何よその言い方。あんた、電話出るときいつつもそんなこと言ってるのかしら。嫌だわ』

甲高い声が耳元で叫ぶ。スマホを少し耳から離れた。

「……何の用?」

『あんた、何かやってるの? 今』

「何も、やってないけど……」

『あのね、ちょっと植松君のおばさんから聞いたんだけどね。ほら、植松君、同じクラスだった。彼ね、今近所のドラッグストアでアルバイトしてるんですって。月曜日から木曜日。偉いわよね。それから金森君のところもね』

母は俺の中学時代の同級生の名をつらつらと上げていった。彼は今どこそこアルバイト、彼女は第二志望の大学で何々を専攻、とまあよくこれだけ集めたものだ。母さんが早口で捲し立てるそれらの言葉は、俺を沼の底に引きずり込むのうってつけな呪文達だ。

『アルバイトって言っても大したもんじゃないのよ、あんたが思っているより。ちよっとお話して、長所短所を言っ、それで面接はおしまいだもの。だから母さん、今から社会に復帰する準備くらいは、っと思っ。あんたのためにも』

「できねえよ、俺には」

腹にあいたブラックホールが心臓の体温を奪っていく。スマホを握る指先が白くなる。あんたのために。なんて白々しい台詞だろう。社会から転がり落ちた俺に最早母さんの求める居場所なんて無い。ただこのまま負け犬として生きていくだけだ。それすらも、お前は許さないというのか。

『違うわよ。だけど、あんただって分かってるでしょ。このままじゃ駄目だっ』

「このままも駄目なら、母さんはまた俺に引き籠もりに戻ってほしいのか。今、こうして、何とか買物だっ、やっ、てるのに」

『怒ることないじゃない。買物くらいで何よ、それくらい皆してるわ!』

「俺はもう『皆』から外れちまったんだよ!」

気付けば怒鳴っていた。画面の奥から息を飲む心配がする。いたたまれなくなっ、俺は通話を切った。

このクソみてえなアパートだっ、親の金だ。いつも間に合わないタイムセールで、値切れなかった二十円も元を辿れば親の財布から出ている。

いい歳して親の脛を嚙り、同級生の進歩を横目にぼけーっと過ごし、厚顔無恥にもここで息をしている。親孝行なんて夢のまた夢。叱咤激励の電話もかけたくなるさ。

籠もっていた実家を出るように勧めたのは父さんだった。栄光の二月、第一志望の進学校に入学して、俺はその初夏にもう心折れた。高難易度の問題を跳ねるように飛び越えていく生徒達。追いかけるのに必死で、俺は寝食を忘れた。追いかけて、追いかけて。それでも追いつけなくて。分かっているもお走り続けて。

周りを見れば、もう誰もいなかった。

毎日部屋に閉じ籠もって、天井の木目を数えたりノートを鉛筆で塗り潰したりして過ごした。もう一度過去の幸せを味わいたくて、小学生の頃の百点ばかりのテストを押し入れから引っ張り出しもした。すぐに気持ち悪くなって吐いた。

見かねた父の、ここから遠い所で少し落ち着いてみないか、という提案にも二もなく飛びついた。息のできる場所へ行きたかった。

初めてこのアパートに来たときは我が目を疑った。きつたねえ。まじかよ、ここ、住めるのかよ。

ゴウンゴウン。遠くで換気扇の重たい稼働音がする。俺は畳に右耳をくっつけた。音はそこから聞こえる。

「なんスか、この音」

俺の疑問に不動産屋のおじさんは答える。

「下にラーメン屋があるんだよ。ま、そういうことで、お安くしとくよ」まさかその他八つの候補を蹴ってまでこの部屋に越すことになるうとは、その時はまだ夢にも思っていなかった。

それから今日まで換気扇の音は絶えたことがない。

俺は小さなちゃぶ台の上に置かれた紙を手取る。今朝、アパートの共同ポストに突っ込んであったチラシ。

『新年の年賀状配達のアルバイト募集中。高校生でも大歓迎』

高校生でも、仕事できんのかよ。ますます俺が滑稽だ。

宇宙人だって年賀状配るんだぜ？ つくづく俺には生産性がない。

窓を北風が叩く。耳を切るようなヒュウという音。冬将軍が部下を引き連れぞろぞろと南下してくる。

父さんとの約束があった。一年間、生活費は出す。その間にアルバイトでもして稼いでいくのならそれでよし、できないのなら家に戻ってやること。「お前の自由を認めていられるのはそれが精一杯だ」父の悲痛な表情、家を出る日に母に握らされた二万円まで、まさまじと脛の裏に蘇る。

タイムリミットが迫っている。

俺のわがままは、母さんと父さんにどんな生活を強いているのだろう。スマホのニュースサイトが、東京での初雪の観測を告げる。

春。

大きく伸びをした。節分を過ぎ桃の節句を駆け抜け、逃げる二月去る三月とはよく言ったものだ。桜の芽も膨らみ始めている。窓から差し込む陽は温かい。

いや、一眠りする前はまだ温かかった。陽だまりの中でついウトウトとし、目が覚めたのは午前四時。肩にかけた毛布が無ければ体は冷え切っていただろう。暦の上では春と言えど、体感ではまだ冬の腕の中だ。

外を走るバイクの音が、寄せては返す波間の夜を切り裂く。すぐ近くでそれは止まった。立て続けに錆びついた郵便受けを開ける高い音。

ポストを見に行こう。俺はクロックスを引っかけてドアを開けた。テールランプの残像だけを残して、見下ろした道に新聞配達バイクが消えていく。

肺の底から息を吐き出す。目の前が白く霞む。やっぱり冬じゃないか。錆びついた外階段を降りてポストへ。途中、通り過ぎた部屋からは洗濯機を回す音が聞こえた。それ以外は何の音もしない。陽が昇るまで、誰も、絶対に、物音一つ立ててはいけません。きつと俺が学校を休んだ日に先生が言っていたのだろう。静謐な夜の帳が街を包み込んでいる。

一階に降り立つ。階下のラーメン屋の硝子扉からは光が漏れている。オレンジ色の白熱電球だ。自然への影響を加味しなければ、俺はLED電球より断然こちらが好きだ。なんといつても優しい色をしているから。

「お、朝から元気だね」

がらりと扉が滑って、店から店主のおじさんが出てきた。白い息を吐く。おじさんは眉を下げて、皺くちやの顔をさらにくちやくちやにする。笑ったのだ。

「もう店じまいだからよ。兄ちゃん、ちよつと食っていかないか」

お言葉に甘えて俺は日に焼けた暖簾を潜った。店の中は右手にL字のカウンター席が五つ、左手に座敷の机が三つの小さな造りだった。店内の何処からでも見える厨房の器具は年季が入っていたが、カウンターはよく磨き抜かれている。机の木目は照明を反射し、どこか胸を張っている。大切に大切に使われてきた証拠だ。

カウンターの一席にちよんと腰掛ける。所在なさげにしている俺の前に、店主は水と箸を差し出す。

「まだ寒いな。こんな寒いから、夜中に坂登ってまで食いに来る客は少ない。ちよんどラーメン一杯分余っちゃった」

皺の寄った顔でぶちぶちと言いなから、店主は手際よくラーメンを茹でる。言い方は素っ気ないが言葉は温かい響きを持っていた。

「あの、俺、ちよつと部屋戻ります。今、財布も何も持ってないんです」「いいよいいよ、そんなん！ どうせ余りもんだ。俺が食わせてえから作るのよ」

浮かせかけた腰をまた下ろすと、店主は少し頷いた。俺は安堵の息を吐いた。

「二階に小学生の男の子がいるだろ？」

店主は一瞬天井を見上げた。釣られて俺も上を向く。そういえば、もうずつと背筋を伸ばしていなかったっけ。

「いつも凶鑑読んでるよな。この前も色々教えてもらったよ。蝶とか蟻とかさ」

「蟻が列を組んで歩くってやつですか？」

「面白いよな。別に列にならなくてもいいって聞いて、びっくりしたよ」いつかの嵐の日に、彼と廊下で鉢合わせた。その時にそんな話をした気がする。

「蟻って目がいらしい。巣を出るときの太陽の位置を覚えて、またちやんと帰ってくるんだってよ」

蟻はフェロモンを出して自分の軌跡を描き、列はそれに沿ってできる。でも、その列の先頭はいつも自分で切り拓いているんだ。

「ちゃんと光を見ていれば迷子にならないってこと」

店主は眉尻を下げて笑った。釣られて俺も、こんな風に笑っていたらいいな。

ゆっくりと時間が流れていく。それを肌で感じた。店主が火にかけていた鍋の蓋を持ち上げると、狭い店内に濃厚なスープの香りが広がる。芳醇な魚介系スープ。思わず口許が綻ぶ。

「はい、一丁あがり」

赤いラーメン井の中で光沢のあるスープが揺れる。麺、チャーシュー、メンマの質素で堅実なトッピング。両手で器を掴めば、手のひらが痺れる程の温かさ。

箸を手に麺を啜る。初めて食べたのに、この一年嗅ぎ慣れた匂いがする。不思議だ。

湯気越しに、満面の笑みの店主兼アパートの大家と目が合う。

「引越し、明日なんだってな。このラーメンはその応援ってことで」

腹が満ちた満足感を抱えて俺は店を後にした。頬に吹き付ける風は冷たいが、温まった体にはむしろ心地良いくらいだった。

店先からは街が一眸できる。このアパートの良いところ。風呂とトイレが別なところ、それから眺めがいいところ。そっか、そうだった。

東の空が白んでいく。上質な絹の夜空が星を散らしながら曙に沈み往く。

ポストに入っていたチラシ。『ドラッグストア牧野 アルバイト募集
中』俺の春からの職場。

—— ねえ、母さん。履歴書ってどこで売ってる？

そう訊いたあの時、冗談でなく脚が震えた。だけど、もう、大丈夫な気がする。だって応援ラーメン食べたし。

一年ぶりに帰る実家は懐かしくもあり、淋しくもある。もう昼まで家にいることはできないな。ああ、ようやく隠れんぼも終わるんだ。

俺はアパートを振り仰いだ。このオンボロの城とももうさようならだ。

俺はワンルームに金の朝日が差し込む情景を思い浮かべた。いいな、ワンルーム。全ての部屋が一瞬で照らされる。

月暈に

愛知県立時習館高等学校 二年

藤本 淳 矢

闇夜に浮かぶ雪のような細かい塵が、月の光に照らされて光る。冬であるからか、深夜の空気は驚くほど澄んでいて、九条はそれをいっぱい吸い込む。

打起こし。大三。引分け。

ここまでくるともうほかの音は聞こえなくなる。ただ、世界には彼と弓とのしかない。

引き絞って「会」へと至る。躰がキリキリと音を立て、筋肉が強張っていく。

一瞬。

自分でも何が起こったのか理解できないほどに、その音は鋭く響く。我に返るとそこには的の真ん中に静かに刺さった矢があるだけだった。

離れ。残心。

肺に溜まっていた残りの空気を吐き出す。

と、

「すごいわね」

呟く声がして彼はその声の方、射場の後ろのあたりを見た。

彼女は感嘆して続ける。

「私にはできる気がしないわね。弓道って、格好いいんだけど、難しい感じもするのね……」

「僕だって最初からこんな風にできたわけじゃない。それはピアノも同じなんじゃない？」

「そうね。でも、かける時間が長い分、ピアノの方が難しいのかもしれないわ」

彼女は立ち上がる。彼も射場から退場した。

「さて」

彼の前に立った彼女がスマホのメモ帳を開きながら言った。

「弓を引いているとき、どんな気持ちがあったのか、教えてくれるかしら？」

その言葉に彼ははにかんだ。

彼女、中川が彼に話しかけたのは昨日の放課後

だった。

「九条君」

「え、は、はい？」

普段から人と話すことを積極的にはしないし、話しかけられることも少なかったので、返事がたどたどしくなってしまう。

中川は全国で見てもかなり優秀なピアノ奏者

で、ついこの間も何かしらの賞をとって全校で表彰されていた。加えて成績優秀で美人ということもあってか、クラスでの評判——特に男子から

——はかなり良い。ただし、彼女も九条と同様に一人でいることが多く、いわゆる「高嶺の花」の

ような状態になっている。

そんな彼女が話しかけてきたのだ。クラスの残っていた男子や女子はただ事ではない。しんと静まって、九条と中川との会話を聴こうとしているようだった。

彼女は表情筋を少しも動かすことなく彼に言う。

「九条君って確か弓道、やっていたわよね」

「え？ あ、うん。そうだけ」

軽くうなずくと彼女は封筒を渡してきた。

「じゃあ、この後私に付き合ってください。場所はここに書いてあるから。時間通りに来て」

そう言って彼女は踵を翻し、教室を出ていく。

果然としていたが、周りの視線が気になって、

彼もそそくさと廊下に出た。クラスメイト達は彼の姿を目で追うだけで話しかけてこようとはしなかった。

昇降口に向かいながら封筒を眺める。封筒には

ゼロハンテープで封がしてあって、封筒もノートを折って作られたものようであった。

その封を切りノートの封筒を開くと、比較的整った字でこう書いてある。

「音楽教室 十八時三十分」

どこの、とは書いてはいなかったが、このあたりで音楽教室といえは榊原音楽教室であるので、多分そこだ。

しかし、彼には理由が分からなかった。音楽の才はないし、わざわざ彼のような暗い男子に話しかけたりするだろうか。

「まさか、告白……?」

口の中で呟いてみて、それはないとすぐに否定した。仮にも彼女は「高嶺の花」。告白なんて、それこそあり得ない。

首をひねっていると、廊下の奥で同じ弓道部員が手を振っている。

「もうすぐ部活始まるよー!」

腕時計を見てみると午後の四時。幸い指定されたのは部活が終わった後であったので、彼はその部員に導かれるまま弓道場に向かった。この何とも言えない、胃のあたりが押し上げられたような気持ちを抑えようと思ったのだ。

部活が終わったのは午後六時ちょうどだった。学校から駅へと向かう長い坂道を下っていく。今日は金曜日で明日は部活もない。でも大会が近かったので、家の近くの弓道場で練習しようと思つて、今日は弓を持って帰る。幸い、音楽教室は通学路の途中にあって学校からもそう遠くはない。五分もすると目的地に着いてしまった。

と、彼はここで待ち合わせ場所が書いていなかったことに気づく。いったいどこで待ってあげば良いのだろう。

所在無げに教室の前をうろうろしていると、ふと窓から音が聴こえてくることに気づいた。

ピアノの音だ。中川が弾いているのだろうか。

よく耳を澄ます。

印象的なメロディーだ。音楽の授業で聴いたこ

とがある。ベートーヴェンの「月光」、第一楽章。

しかし、その音は音楽の授業で聴いたものよりも少し響きが弱いように思える。体の芯に届かない、というのだろうか。何とも落ち着きなく、ただ宙を当てもなくさまよっているような、そんな感じがするのだ。

そのあとも「月光」の演奏は続き、軽やかな第二楽章、激情奔る第三楽章に移り変わっていく。音に底がある。第二楽章はウサギが、第三楽章は激流に飲まれて落ちていく人の姿が連想された。それでも、彼には第一楽章の、あのふらつくような感じが気になった。

最後の音が響き、町がそれを吸い込んで静かになってしまふと、彼は時計を見た。午後六時二十分。冬空の色の移り変わりはとても早く、冬の大三角と思しき星々がすでに瞬いていた。

平屋建ての音楽教室の玄関のドアが開く。中川さんと堀からのぞき込むが、知らない人であったので気まずくなって彼はスマホを取り出して、特に面白くもないニュースを眺める。そのあとも教室から何人か出てきて、彼は必死に気配を隠した。

やがて。

「あら、早いね」

声のした方を見ると中川がいた。髪を後ろでまとめて、頬が少し上気している。

「入って」

そう言うのと彼女は教室の中へ入っていく。部外

者が入っていいものかと少し迷ったが、彼女に従って中に入る。

中はしんとしていた。広々とした木目調の空間には、中心にピアノが一台あるだけ。そこだけ、真つ暗な室内においてもさらに黒く、世界中の闇をいっぺんに集めて煮詰めたようである。

中川はピアノの椅子に座るとその向かいにあった木椅子を勧める。彼はそれにゆつくりと腰かけた。

「まずはこれを聴いてほしいの」

ピアノの鍵盤に手をかけながら中川は言った。頷くと彼女はそつと黒鍵を押す。

流れてくるのは「月光」。流れるような旋律、さながら水面のように揺らめく。しかし、感じるのはやはり先の感想だった。

第三楽章まで弾き終えてしまふと、彼女は問いかけてきた。

「どのように感じた? ああ、気遣つて嘘とか言わなくていいから」

「じゃあ、率直に言わせてもらおうと……」

九条は感じたことを包み隠さずに話した。考え込むような仕草をして、彼女は「やっぱり」と呟く。

「どういふこと?」

そう訊くと彼女は顔を上げて彼の方を見た。

「話というのは、あなたに私の曲の手伝いをしてほしい、ということなの」

「曲って、この月光?」

「そうよ。今度のコンクールでこの曲を弾くの。手伝ってくれるわよね？」

九条はあまり気が進まなかった。もうすぐテスト期間で勉強しなかったし、ピアノのことはさっぱり分らない。だが、なぜだか彼には、それを受けなければならぬような気がしていた。

「……いいよ。何をすればいいの？」

「そうね。じゃあ、あなたが弓を引いているところを見せてもらおうかしら」

その過程を経て今に至る。この時間でも開いている弓道場は開いているものであり、彼と中川は町はずれにある弓道場に来ているのだった。

弓を引いている間の感覚を教えると中川は頷きながらメモを取っていた。

「なるほどね。雪が降るような、ね——他には何かある？」

「そうだな……肺に冷たい空気が入って、肺が凍るみたいで……あ、弓を引いている間は的しか見えてないよ」

「それは、孤独な感じ？」

「いや、むしろ満たされてるような感じ」

「満たされる……？」

彼女は小首を傾げた。彼もうまく言葉にできず、言葉を探してみるけれど見つからなかった。

満たされる……いったい何に対してそう思ったのだろう。満たされるといふからには何か空っぽのほずであるのだが。

「いったい、何に対してそう思ったのだろうか？ 彼女がふんと鼻を鳴らし、それで九条はうつむいていた視線を彼女の方へと戻した。

「まあ、いいわ。あなたがわからないのなら、きっと私にだってわからないもの」

中川は肩をすくめるとそのまま出口へ向かって歩き出した。

「私は帰るわ。あなたの感覚、大方理解できたし」

「そうなの？」

「ええ。コンクールのチケットはそこに置いておくわ」

彼女は九条の鞆袋の上に長方形の紙を置いた。

「じゃあね」

誰もいない、痛いほどに静かな道場を去り、さらに温かさが減ったようなそこを見て、僕はうつむき、再び弓を持った。この迷ったような気持ち、弓を引いて消してしまおう。

再び無心に戻る九条の心は、無意識に中川の、泣きそうになっている顔を浮かべていた。彼女は会った時からずっとその顔だった。

帰り道は一人きり。彼は分厚く曇ってしまった空を見上げる。雪が降るかもしれない。

彼はその時腑に落ちた。あの、「満たされる」感覚。「空っぽなわけがない？」いや、違う。自分は空っぽだ。きつと、あの日から。

——あの日。中学生だった僕は交通事故を目撃した。僕は、スマホを取り出して救急に電話をか

けることもせず、ただ棒立ちしていた。

恐怖で動けなかったからじゃない。ひかれた人が、見知った人だったからだ。血がゆつくりと広がっていくのを、僕は見つめていることしかできなかった。

その十日後、僕は葬式に参列していた。遺影には父と母、妹の顔が笑顔で飾られていた。

家族が死んでから、僕の気持ちは暗く、淀んだ。学校にはかろうじて行けていたし、休み時間には友達と遊んで笑っていたし、大丈夫なはずだった。でも、参加していたテニス部には行く勇気が持てなかった。きつと、どこかで恐れていた。他人とかわることを。そして、下手な慰めをもらうことも。

高校は前から狙っていた高校よりレベルが下のものに受かった。学業にも、身が入っていなかったのだ。

高校に上がってからできることにワクワクしていたはずだったのに、それらは手につかず、ただ、新人生歓迎会で誘われた弓道部に入って弓を引いた。弓を引いている間だけ、その過去を忘れられた。

でも、やっぱり僕は空っぽのまままだ。何一つとして変わることもなく、現実から逃げてばかりの僕は、きつと惨めだ。

だから、どこかで魅かれていた。彼女の堂々とした生き方、佇まいに——。

コンクール当日は雨であった。制服を着て、小さなバックパックを背負い、彼は部屋の中にある遺影を見た。

「……いつてきます」

——私には夢があった。

ピアノストになること？ いや、違う。私は歌手になりたかった。

この夢を否定されたのは四年前。私が高校受験をやめるといったとき。

その頃の私は動画サイトの「歌手手」にあこがれ、古いアニメの曲やボカロ、有名なポップスなどをカラオケに籠って練習し、それをサイトに投稿していた。

ピアノは続けていた。幼稚園から続けていたものであったし、今更引つ込みもつかなかった。私はピアノがそこまで上手いというわけではなかったが、母親からの期待もあり「やめる」と言えなかったのだ。

そんなある日、動画サイトに挙げた曲がバズった。それに味を占めた私はそれを母に報告した。

「ここまで私の歌がバズっているの。もつとうまくなりたいたいから専門学校に行きたい」

しかし、母は許さなかった。「ピアノのためならばそれもいいけど、あなたを歌いたいんだなんて一度も言わなかったじゃない。そんなのじゃ、あ

なたにかけたお金がもったいないわ。そんなことのために専門学校へ行くんだったら、普通の高校へ行きなさい」

母は一度決めたら絶対に曲げることはなく、私の進路を勝手に決めて勉強するように部屋へと閉じ込めた。部屋の中には勉強机とピアノだけ。

私は夢をあきらめた。だから、うらやましかったのかもしれない。彼が、弓道という好きなものに打ち込むことができて。

このコンクールで結果を残すことができなければ、ピアノもやめようと思っている。続けていても意味がないと、思えるから——。

コンクール当日。目を覚ますと時計は四時半を指している。いつもそうだ。望んでいない日を迎えたとき、時計は決まって早朝なのだ。

二度寝を試みるけれど、目が冴えてしまつて眠れない。中川は歌を歌うことにした。幸いにも部屋は防音になっていて家族を起こす心配もない。「荒城の月」。滝廉太郎作。悲壮感たっぷりのその曲は、彼女に勇気をもたらしてくれる。

彼女は被害妄想にふけるのが好きだった。いつも「どうして、自分だけがこんな目に」と思つて、惨めな気持ちになるとどこか救われたような気持ちになつた。誰もほめてくれない、誰も認めてくれない、誰も私を見てくれない。そんな、救いようのない気持ちに襲われるたびに、彼女は自分らしくいられるのだった。

学校での私は飾り。頭がよくて、「高嶺の花」だなんてとんでもない。私は惨めな女だ。そんなことしか考えられない、情けない女だ。

歌い終えてしまうと、急に何のやる気も起きなくなつた。ただ、「その時」から逃げられないという恐怖と安心感が、彼女の心を取り巻くだけだった。

コンクール開始の一時間前に、中川は会場に到着する。会場は開始二時間前から開いていて、出場者は練習を行うことができたが、彼女はそんな気は起きなかった。

広いとは言えない控室に入ると、そこは同年代とその保護者でいっぱいになっていた。皆、頬や唇を軽く染め、その時を待っている。

彼女はその隅、小さな丸椅子があるだけの場所に腰かけて、周りを見渡す。

笑つていた。彼ら彼女らはステージという避けえないイベントを前にして、さも楽しむかのように笑つていた。

笑うとは何だろう、と彼女は思う。感情がわからないわけじゃない。彼女には「笑う」という行為が、何のためにあるのか分からなかった。

楽しくて、悲しくて、それでも笑う。その意味を、効果を、彼女は忘れてしまった。

カラオケで歌を歌っていた時は、私は笑えていただろうか。それとも、陰鬱な顔を見せて動画を投稿していた？

彼女は、口角を上げた。せめて、周りと同じように、みんなが、私を見てくれるように。

やがてコンクールが始まって、控室から人がどんと出ていく。課題曲に選ばれた「月光」は十五分ほどの曲で、全員が弾き終わるまでに相当な時間がかかる。中川は後ろから四番目だった。

彼女は憂鬱な気持ちで部屋の、何も映っていない鏡を見ていたが、とうとう彼女の出演がやってくる。開始から二時間経っていた。

すっかり重くなってしまった腰を上げる。

「頑張つて！」

母親がファイトを送るが、彼女はそれには答えずにそのまま通り過ぎた。

彼女の眼は、虚空を凝視して、ただ、燃えているばかりだった。

九条が会場に着いたのは、コンクールが始まってから一時間半も後のことだった。日曜日だというのに電車が混んでいて、人身事故も起きてしまったらしく遅延していたのだった。

彼は息を切らせてコンサートホールの受付へと飛び込んだ。受付はまだしているようで、彼は胸をなでおろす。

受付を済ませてしまうと、彼は息を整えるようにゆっくりと歩き始めた。

彼はこのコンサートにどうしても行かなければ

ならない気がしていた。中川の頼みを断らなかつた時と同じだ。彼女には何かしらの魅力があるのか。それが果たして、彼女が高嶺の花だからか、はたまた彼女の泣きそうな顔が目には焼き付いているからか、その真偽を彼は理解できていなかった。

大ホールの重厚な扉を、体を押し付けるようにして開けると、中から激しいピアノの音が聴こえてくる。第三楽章だ。プログラムを見ると、中川の演目はこの次である。

一番後ろの席に座ると、下までよく見通すことができた。真剣に聴いている人、うつらうつらしている人、子供をあやしている人……さまざまである。

そのなかで、家族連れの姿を見ると心が痛んだ。家族が死んだことに整理はついているはずなのであるが、同じような姿を見るとどうしても感傷的な気持ちになってしまうのだった。

ふと音が途切れ、彼はステージの方を見た。さっきまで弾いていた演奏者が観客に向かって一礼している。

やがて、中川が裾から出てくる。黒いドレスを着ていて、しかしその表情は前にあつた時と変わることはない、悲壮感にあふれるものであつた。

彼女がこちらに向かって一礼すると、観客席から大きな拍手が巻き起こる。彼女は様々なコンクールで賞を取っていると聞くと、その分期待も大きいのだろう。

彼女がピアノの前に座ると、途端に拍手がやみ、

ホールは静寂に包まれる。さながら、台風の目に入った町のように。

月光、第一楽章。

聞き覚えのあるメロディーが流れ、彼は息をのんだ。

見えたのだ。その情景が。しんと静まったただだつ広いヒノキ張りの床の上で、袴を着た女が弓を引く。弦の立てるキリキリという音を響かせながら会へと至る。もう、的しか見えていない。音もなく離れをし、その矢は吸い込まれるように的の中心へと入っていく。

心地よいと感じた。穏やかでありながら激しさを秘めたその旋律は、彼を驚かせるのに充分であつた。

「静」と「動」を抱えながら、第一楽章は終わる。ここからは第二楽章、第三楽章が展開され、さらなる心地よさを与えてくれる、そう予感させた。

胸を躍らせながらその旋律を待つ。

しかし、中川はなぜかピアノに手を置いたまま、続きを弾こうとはしなかった。

今度は長く、苦しい沈黙だ。いつになったら始めるのかという期待と非難がにじみ出ているよう。

ようやく弾き始めたそれは、しかし第二楽章の旋律ではなかった。

「春高樓の花の宴、巡る盃影さして——」

それは聞き覚えのある歌だった。荒城の月。当然ながら、課題曲ではない。

ざわつく観客たちには気にも留めず、彼女はただ歌う。悲壮感のこもった歌を。

観客たちは「何が起きているのか」と騒いでいたが、九条はその曲を、身を乗り出して聴いていた。

彼は理解した。彼女のその表情も、自分の満たされない思いも、このコンクールに來なければならなかった理由も。すべて、理解した。

その旋律は彼の心にわだかまるありとあらゆるものをほどこいていく。彼は気づけば涙を流していた。彼は、最後尾の列で一人嗚咽を漏らしているのだった。

コンクールには当然のごとく、入賞できなかった。当たり前だ、と彼女は思った。荒城の月を演奏したのだ、叱られてもおかしくはない。

だから、審査委員長に呼び出されたとき、彼女は同時に覚悟した。彼女にあるすべてを失う覚悟を。

「中川あきらさん、だね？」

「はぐ」
彼女はうつむき、目を瞑った。しかし、彼女が思っているような言葉はかけられなかった。

「素晴らしい」
「……え？ あの、月光が、ですか？」

「いやいや、荒城の月の方だ。あそこまで人の心に訴えかけてくる演奏は聴いたことがない。大したものだ。入賞はしなかったが、こんなコンクールでなければ私は君を金賞にしていた」

彼女は委員長のこと言っていることが分からなかった。とどのつまり、この人は自分の犯したことを責めるわけでもなく、むしろ称賛している、ということだろうか。

理解が追い付かなかったが、ともかく彼女は嬉しかった。自分を見てもらえて、ほめてもらえて嬉しかったのだ。ただ、それだけであった。

雨の上がった帰り道。コンサートホールを出ると九条の姿があった。

中川は一瞬迷った後、九条に頭を下げた。
「せっかくな来てくれたのにごめんさい。月光、楽しみにしていたのに」

「い、いや、そんな。頭を上げてよ。僕だってそんなに的確な情報とかあげられなかったし」

中川が顔を上げると、九条が微笑んだ。
「むしろ、ありがとう。あそこで、あの曲を弾いてくれて。おかげで、その、憑き物が取れたっていうか、その、なんていうんだろう。うまく言葉にできないけど」

彼は首の後ろを掻きながらそう言った。それを見て、ああ、いいなあと思った。自分はそんな、感謝されるようなことは何一つしてなくて、ただ、自分の心が暴走しただけなのだ。高校生にも

なつて恥ずかしい。

その時、彼女はようやく気付く。自身が、笑みを浮かべていたことに。作り物ではない、本物の笑顔。

彼女は慌てて九条からそれを隠そうとしたが、筋肉が張ってしまったなかなか元に戻らずに苦戦を強いられる。

——そっか、私、楽しかったんだ。嬉しくって、それで——。

彼女は知らないうちに声を上げて笑っていた。目の前の九条がびくつとしたが、それでおかしくなつて彼も笑い出す。広場を駆け回り、水たまりに寝転んでびしょびしょになって、それでも笑っていたくなるような、どうしようもない気持ちだった。

空はまだ曇っていたが、ところどころから晴れ間が見え始めている。その光景はあまりにも幻想的で……。

そして彼女は、泣いていた。笑いながらに泣いていたのだった。

叶

愛知県立熱田高等学校 二年

川 口 美 沙

「ずっと歌っていたい。」

そんなバカみたいに単純で純粋な夢を、俺は夢見た日から今まで必死に追い続けている。

強大な力を前にすると人はこんなにもやる気と意識と心を奪われるのかと、この人に出会って俺は初めて知った。

スピーカーから響く激しいヒップホップミュージックに合わせて、キレのいいダンスを披露する男。複雑なステップをいとも簡単にこなし、時々見せる無邪気な笑顔も道行く人を引き付ける。そのせいか始まって間もないのに彼の周りには既に多くの人が集まっていて、皆が手を上げリズムに乗り、そして彼の名前をこう呼ぶ。

「『タイガ』……」

羨ましいくらいいの盛り上がりを目に、俺はマイクの電源を切ってアコギを片付けて、黒マスクで口を覆った。

この人が来たら、もう俺の出番はない。

高校一年生の俺は、月に二・三回、休日の午後公園でライブをする、いわゆる路上ミュージシャンだ。主にアコースティックギターで弾き語りをしていて、曲は自分が好きなものより流行りのものをやり、たまにリクエストに応えたりもしている。始めたのは去年からだ、やっと立ち止まって俺の歌や演奏を聴いてくれる人が増えたところだ。本当にごくまれに、金を少額だが投げてくれる人もいて、それが嬉しいし、マイクの前に立つモチベーションにもなっていた。

それでも、始めた理由は決してお小遣い稼ぎのためとかいう生半可なものではない。俺には夢があるからだ。ずっと歌っていたい。

気づけばそれが夢になって、目標になって、俺はそれをどうにか叶えようとしていた。何をしなければいけないのかたくさん考えた。ボイストレーニングをし、人前で堂々と歌えるくらいの自信を付け、ギターだって弾けるようになった。いっぱい頑張った。

でも、それだけやっても——いや、それだけで夢に手が届くほど現実には甘くなかった。事務所のオーディションを何回も受けて、でも全部ダメで、音楽で食っていくっていうのは俺が思っていた以上に厳しいものだ、何度も分からされた。

でも、諦めきれなかった。何をしてでも、絶対に叶えたかったんだ。だから、俺はこうして路上ミュージシャンとし

て経験を積むことにした。あわよくばスカウトもあったり、なんて期待して。

(まあ今の俺が『タイガ』に敵わない時点で終わってんだけど)

俺と同じ、路上で音楽を使ったパフォーマンスをする男——『タイガ』。俺は路上ライブを始めてすぐのころに初めて彼のダンスを見て、そして早々に絶望した。悔しい、俺もこんなふうになりたい。たくさんの矛盾した感情が溢れ出したなか、最後にふっと湧いたのは、『諦め』だった。

この人には勝てない。そう思った。だからと言ってライブをやらない選択肢はないし、夢だつて捨てられない。

(でも頑張っても無理なものは無理だし) いつも笑顔で楽しそう、それが眩しい。人気があつて羨ましい。

あの人と俺は、きっと何かもが違う。

音楽が止まると、タイガの周りには大きな歓声と拍手に包まれた。コインの音もした。そのタイガは丁寧にお辞儀をし、いい笑顔で観客に挨拶をしている。俺はなぜかその姿に目が離せなくなつて、けど同時にすぐく居た堪れなくなつて、逃げるようにしてその場を去った。

ギターケースを持つ手に力を込める。

そうだ、ここにもう用はない。

なんとか気持ち切り替えながらも、歩くスピードを速めた——その時。

「あー待つてまって、ミュージシャン君！」

いい声で、けど焦ったように誰かが俺を呼び止めた。その口振りからして、何かしらの目的があつて俺に話しかけてきたのだとわかる。

（——まさか、スカウト？）

気づいてしまえばそれしか考えられなくなるのはまさにこういうことで、ただの一瞬间で体全体に期待感が広がっていく。さっきまでの暗い気持ちりが流されたのをいいことに、意気揚々と振り返ると——そこには。

「ごめんな、大声で呼び止めて。会えたら絶対話しかけようって決めてたのに、いつの間にかいなくなってるから焦っちゃってな……お客さんに無理言つて君に声をかけに行つたはいいものの君は歩くの速すぎるし！ 追いつけんわ！ ははは」

「え、は……!？」

俺は目の前の人物を見て、ただ放心して固まることしかできなかった。それくらい、まったくの予想外。それは、スカウトでも何でもなかった。

ただ嫌味なくらいに明るい笑顔で、あの『タイガ』が立っていたのだ。

（……というか俺単純すぎ!）

結局。俺はどうしても一緒に話したいというタイガの誘いを受け、奢られた飲み物片手にベンチに座っていた。俺が微糖コーヒーを選んだのに対して、彼はオレンジジュースを特に迷うことな

く買い、腰に手を当て、豪快に、喉を鳴らしながらそれを飲んでいた。

「ぶはーっ！ やっぱり頑張つて踊つたあとのオレンジはいいな。沁みるわあ……」

「いやオヤジくせエ……」

「おっと？ 高校生の君にとって二十歳の俺はもうおっさんか？ 辛いねー」

「別にそういうんじゃないくて。普通に飲めばいい話だろ」

「もう、これが美味いっていうのに、分かつてないなあ。それにそういう君だつて、子供のくせにコーヒー飲んでるじゃん」

「俺は子供じゃねえよ」

「そう？ まあ俺からしたら背伸びしてることに変わりはないけどな」

（ああ、俺のなかの『タイガ』像がどんどん変わつていく……こんなヤツだったのか）

明るく気さくで、少し子供っぽい。でもおっさん……大人っぽいところもある。『タイガ』はそんな人だった。カッコいい、神みたいなのヤツ、なんて簡単な言葉で彼のことを片付けていたけど、それだけじゃない、本当の一面を見られて、親近感すら覚える。そしてそれは、憶測だけでは、パフォーマンスを見ていただけでは分からなかったことだ。こうして話してみても初めて分かった素顔だ。オレンジジュースが好きとか……。

俺が勝手に引いていただけで、本当は大人と子供の間に境界線なんてものはないのかもしれない

い。気楽なこの人を見てみると、そう思えた。心が少し軽くなるというか。

大人は夢を見ちゃいけない、なんてことはないし。誰だつて、心の底から楽しめるような何かを持っていたんだ——きつと。

（つて、そんなことより!）

「で。アンタはなんで俺と話したいんすか」

あやうく本来ここにいる理由を忘れそうになっていた。タイガは俺とどうしても話したいと言ってきたのだ。そのオマケのジュースから始めて、彼のことをいろいろと考えていたら始まりだった。まあ思い出せたんだしそれでいいけど。『タイガ』のことも少しは知ることができたし。

「あーそういえばそうだったな!」

軽い返事に若干呆れつつ、次の言葉を待つ。

「君とは同じ音楽を愛する者同士、語り合えることもあるんじゃないかと思つてね?」

「え?」

この人は急に何を言い出したんだ。本気でそう思った。さっきとはまるで違つた真面目さに驚いたのがあるが、素直に言葉を受け取れない。引くかかかることが多すぎた。

まず俺と『タイガ』はまったくの正反対だと思つていた身からしたら、その言葉は驚き以外の何もでもない。それに——。

「俺、音楽を愛するように見えますか」

彼はばちばち、と瞬きを繰り返した。

「え、そうじゃないの？ だって君もパフォーマーで、音楽を使うわけだろ。それに、好きでもないものにあれだけの熱量はかけられないはずだし……」

何を疑問に思っているんだろうか。

「俺には必要なだけつす、音楽が。夢を叶えるために。そりゃあまあ、それが嫌っていうわけじゃないけど……」

俺の言葉にタイガはすぐに返事をしなかった。少ししてからじゃあ、と口を開く。

「じゃあ、君にとっては音楽は一種の道具みたいなものなんだ」

なぜかその物言いに、胸の奥が針に刺されたように痛んだ気がした。けど放っておく。しようがないんだから。

「夢を叶えるためだから」

「へえ……夢ね」

「そ。俺には夢があるんだよ、ずっと歌っていたい、っていう夢がな。で、それを叶えるためならなんだってやってきた。ポイトレはもちろん、ギターとか、メンタル面のことだって、たくさん。俺にできることは全部やった。まあそれでもダメなときはダメだったけどな。ホント、夢を叶えたってだけで、どうしてこんなに大変な思いばかりしなくちやいけなんでしょうね？ それ以上のこと何にもないのに」

（——なんでだ？）

夢の話をしているだけなのに、それを口にすれ

ばするほど妙に嫌な感じが胸に広がっていく。それが気持ち悪くて何度もコーヒーを流し込むが、苦みが喉に残るだけ。それでも俺は話すのをやめなかった。

やめられなかった。

「でも俺にはそれしかないんだ。夢を叶えることしか。だから路上ライブでもやってやろうって思っ、スカウトだって期待してた。けど、そしてたらアンタがいるもんな——『タイガ』さん。いつも笑顔でカッコよくて、皆の人気者で好かれて、アイドルみたいに眩しくて……いいなあ。俺じゃ絶対アンタに敵わないのにな……」

苦しかった。言い訳がましい言葉はすっかり並べ、それは意味すらなしていなかった。ハツとして俯いていた顔を上げる。

タイガはそんな俺を見て、こう言い放ったのだった。

「——さつきから夢を叶えるためだから、とか、夢がゆめが、つて。それってそんなに大事なもののなの？」

いよいよ訳がわからなかった。夢を小馬鹿にされたようで腹が立った。

「なんでそんなこと言うんだよ？ アンタだって夢があるから、路上でダンスなんかやってんだろ。なのに……」

俺と同じじゃないのかよ。勝手に裏切られた気持ちになつて、必死に言い返す。

でも、何より一番、自分に腹が立っていた。好

き勝手ネガティブになって怒って。

夢をバカにしているのは、他でもない俺なのに。それでもこの口を止めることができなかった。

「人気があるから焦らなくていいんだよな。見てくれる人がいて、認めてお金を投げてくれる人もいる。でも俺にはいない。こんなに頑張ってるのに、俺の声を聴いてくれる人はいないんだ。夢を叶えるしか道はないのに、それで成果が上がらなかつたら不安にもなるだろうが。俺はただ意味がほしいだけなのに。夢に向かって頑張ってるっていう証拠が——」

「俺が見てる。俺が知ってる」

俺の話を遮るようにタイガは言った。もうその先を言わせたくないような、そんな気さえ与える。たったの一言なのに、それがただ嬉しかった。

「じゃあ……」

俺はタイガに何と言ってほしかったんだろう。

反射的に口を動かしたがその先を俺が紡ぐことはなかった。

「俺な、音楽つて、『解放』だと思っんだ」

「は？」

突如彼はそんなことを言ったのだ。解放？ 全く意味が分からず言われるままの俺に、タイガの声は芯が通った、力強いものだった。

「俺を『解放』する音楽。誰かの心を『解放』させる音楽」

そして、遠くを見つめたその目には確かな光をたたえていた。

「辛いこと、嫌なことを糧に、それすら楽しんで踊り歌う。そんな人それぞれだろって思うかも知れないけど、俺はそのスタンスで今までやってきた。で、これからもそのスタンスは崩さないつもり」

タイガはハッキリと言うが。

「それが何だって言うんだ」

しかしそんな俺の苛ついたような口調に、彼はなぜか笑ってみせたのだ。しかもそれは、とつても優しいもので――。

「なんで笑ってるんだよ？」

「ね、君は『解放』できてる？」

「だから何言ってる……」

『夢を叶える』ってこと自体、楽しめてる？」

（楽しむ……）

『楽しむ』なんて言葉を久しぶりに聞いた気がした。でもそれは、ずっと俺のなかにあったものだ。でも、最後にそれを感じたのはいつだったか。自分の歌で演奏で、それを感じられなくなったのはいつだったか。それでもその思いを忘れないでいられたのは、きっとあの人のパフォーマンスがあったからだ。見ていると胸に何か引っかかるような感じがした。でも俺はそれを嫉妬や羨ましさだと思っていた。本当は、それだけじゃなかったんだ。いつかに忘れてしまっていた、『使命感』を優先して押し込めていた『楽しいっていう気持ち』が、もう一度俺を動かそうとしていたんだ。それが解放なのか？

（そうか――）

「俺の夢はね、俺のダンスでたくさんの人を心の底から感動させることなんだ。それこそ、誰かの心を解放させること。俺は、夢を叶えようとしている今すら大好きで楽しいんだ！」

（そういうことだったんだ）

この人は。

「君を見てると思うんだ。歌も演奏も上手い。格好いい。けどどこか感じる違和感。苦しうなんだ、君は。もしそれが、君がさっき俺に伝えてくれた、『必死に夢を叶えようとしている』ってことに起因してくるなら――もちろん今の君が間違っているってわけじゃない」

これは俺個人の意見なんだけど。

伝えておきたいからさ。

タイガは言った。柔らかな笑顔で。

「夢を抱きしめるものじゃなくて、手を繋いでおくものだよ」

恥ずかしげもなくそう伝える彼に、俺は目が離せなかった。素直に輝く、眩しい光。でもそれは、ただ輝いているだけじゃない。俺の心に灯って、真つ暗だったそこを明るく、そして暖かく照らした。

胸が、熱くなる。

「抱きしめていたら、両手が塞がっちゃうでしょ。それに、そのことしか考えられなくなって視界は狭くなる」

でも大丈夫。夢を叶えようと頑張っているのな

ら、それは簡単に、離れていかないから。絶対な！」

タイガは俺に、伝えてくれたんだ。

夢を追うってことは、何なのか。

俺はふと、初めてライブをやったときのことを思い出した。最初は緊張でどうにかなってしまいで、ハッキリとしたことも覚えていないけど。

きつと、楽しかった。楽しかったんだ。ただワクワクしていて、体中を熱い気持ちで駆け巡って、まだ終わりたくないって思ったんだ。

なんで忘れていられた？

「気づけたんないんだよ」

ニツ、とタイガは笑った。安心する笑みだった。

「これからどうするかは君次第だけだな」

頷きの意味も込めて、俺も笑った。挑戦的だね、と満足そうに言ったタイガはおもむろに立ち上がると俺に背中を見せたまま呟く。

「お前は昔の俺みたいでさ、見てて辛かったんだ」

けど、と振り向きまた笑う。

「届いてよかった。どうしても伝えたかったから。それが、お節介になるかもしれないけども」

「そんなことなかったっすよ」

大人な一面には、やっぱり憧れてしまうな。

「ありがとうございます」

俺、頑張るから。そんなことを思いながら、俺はタイガに言葉を送った。

「あ、そうだ。最後に一ついい？」

もうそろそろバイトの時間だ、とやっぱりさつきまでの雰囲気壊すように彼は軽く言った。

「何ですか。何でも答えてやりませうよ」

「名前」

その二文字になんとか妙に驚いてしまった。そういえば、一度も彼に名前を呼んでもらったことはないような。彼の顧客が『タイガ』と呼んでいたから俺も時々そう呼んでいただけで、俺の名前は教えていないような。

「君の名前、教えてほしいな。俺のは知ってるんですよ？」 大雅ね。フルネームで、有馬大雅」

大きいに、みやび、ね。その時初めて俺はタイガの漢字を知った。大きな雅と書いて大雅。いい名前だなあ。

「で、君は知ってるのに俺が知らないってのはイヤだから。教えて！」

俺の名前。

きつと忘れられない名前になるぞ、と宣言して、俺は自信満々に言った。

「叶。狩野叶だ」

大雅は軽やかに笑った。

「素敵！」

大雅が去ったあと。俺はしばらくベンチで一人、ただぼうつとしながら座っていた。ふと握ったままだったコーヒーの存在を思い出して、一口飲む。

(……夢と手を繋いでおく、か)

それほどまで長い時間話していたわけではないのに、やけに濃厚で充実した時間だったなあと改めて思った。たくさん気付けたことがあった。夢を抱きしめていたこと——手を繋いでいてもそれは離れないこと。

俺の夢は、『ずっと歌っていたい』だ。けどいつしかそれはどんな形を変えていつてしまった。人氣がほしい、認められていたい。それも一つの夢なのだろうけど、もう今の俺はそれが目標であって俺が純粹に追いかけていたかった夢じゃないとわかったから。

これからまた夢を追い続ける日々だ。でも真新しい気持ちで進むことができる——楽しみだと思える。もう一つ、目標もできたし。

大雅さん——アンタに並べるように。

「歌いたいなあ」

心から、そう思った。

バカみたいに愛しい夢と、俺は進んでいく。それを叶えにいく。どんなつらいことがあっても切り替えていけるかと聞かれたら、そうすぐには答えられないかもしれないけど。けど、そうだとしても今の俺なら大丈夫だと思えたから。

『叶』——その名前を誇れるような俺になるまで、進む。できる気がした。

湖底の水が繋ぐもの

名古屋市立向陽高等学校 二年

山 中 琴 乃

「ハアツハアツ」

息を吸う度に冷えた空気が肺を突き刺す。上がりきった息に、顎の奥が引つ張られたように痛んだ。口から出た白い息が隣を走る妹の姿を隠しては、溶けるように消えていく。

「ハアツハアツ」

右手に感じる唯一の温もりを離すものかと握りしめて、雪に取られそうになる足を必死に動かす。この雪では足跡が残って、行き先を誤魔化すことは難しいだろう。ならば、と今はただ遠くへ進むことだけに意識を向けた。

「キヤツ」

「ミリア! 大丈夫か」

「だいじようぶ、ちよつと足がすべっただけだよ、お兄ちゃん」

「おい、足跡があるぞ。こつちだ!」

ミリアを助け起こそうと手を差し伸べると、少し離れたところから怒鳴り声が響いた。ミリアの

肩がビクリと震える。急いでミリアの手を掴み、声から少しでも離れようと再び足を動かす。永遠に雪と木だけの景色が続くのかと恐怖すら覚え始めたその時、突然それは終わりを告げた。パツと視界が開ける。思わず足を止めると、目の前に広がっていたのは一面を氷に覆われた湖だった。反対の岸が霞んで見えないほど大きな湖は、空を凍らせてはめ込んだような、どこか非現実じみた色をしていた。

「ここは——」

「そこまでだ。チツ、手間かけさせやがって。もう逃げ場はねえ、観念しな」

低くドスの効いた、暴力に慣れきった声。背後からかけられた声に振り返ると、男はもうあと数歩のところまで迫っていた。咄嗟になにか武器になるものはないかと見回すが、目に入ったのは左右から追い詰めようとする男の仲間だけだった。このままでは取り囲まれて捕まってしまう。せめてミリアだけでも逃がしたいが、痩せ細った子どもの力では大柄でいかにも力が強そうな男たちの足止めすらできないだろう。前方と左右には敵、後ろには氷を張った湖。——しょうがない、一か八かだ。

「ミリア、こつちだ!」

「おい、待て!」

くるりと反転しミリアの手を引っ張って、いつ割れるとも知らない氷上を駆ける。それでも男たちは追いかけてこようとしていたが、表面に張っ

ただけの氷に大人の男の体重を支えるほどの強度はなかったようだ。氷に濡れ悪態をつく声を後ろ手に聞きつつ、ひたすらに逃げる。

振り返ることなく走り続け、ようやく男たちの声が開こえなくなった頃、自然と速度は落ちていき、ついに僕らの足は動かなくなった。止まった瞬間安心したのか、膝から力が抜け二人して座り込んでしまう。しばらくの間、息をする音だけが凍てついた世界に吸い込まれていく。

「ハアツハアツ、ここまで来れば直ぐには追いつけないだろ。ミリア、大丈夫か?」

「ケホツ。う、うん」

「あいつらが追いかけれないうちにできるだけ距離を稼ぎたい。辛いだろうけど、歩けるか?」

「……がんばる」

寒さと緊張と疲労で限界に近い体に鞭打って、どうにか立ち上がる。だが、ふと氷についている赤くなつた手を見て思ってしまう。男たちから逃げたとして、その後はどうするのか、と。

逃げ出した時はただ、ここに居てはいけないという気持ちだけだった。家に戻らないといけないと思つた。だが、そもそもなぜ僕は連れていかれたのか。なぜ母さんと父さんは帰ってこなかったのか。もしかしたら、僕らはもう——。

「お兄ちゃん!」

パキツ、と何かが割れる音が聞こえた気がした。本当にそんな音が鳴つたのか、自分を支える心にヒビが入った音だったのかは分からない。ただ次

の瞬間、全身が重く冷たい水に包まれ、歪み凍った空が頭上に広がっていた。ミリアの叫ぶ声が遠くで聞こえる。口端から漏れた気泡をどこか他人事のような気持ちで見つめながら、意識を手放した。

温かい。体温よりも少し高い温度に包まれて、安心感を覚える。幼い頃父さんと母さんの間に潜り込んで寝た時に感じたのに似ているかもしれない。まぶたを閉じた世界は光を透かして程よく明るい。

もう少しだけこのままで。そう思ってまた意識を手放そうとした時、ふと世界が陰った。左手に何かが触れる。その感覚に、起きなければという強い思いにとらわれた。

思いに従うようにまぶたを開けると、深い青と淡い翠が合わさった煌めきが視界に飛び込んだ。それがミリアの瞳だと直ぐに分からなかったのは、次の瞬間にはミリアが文字通り飛び込んだからだ。

「お兄ちゃん！」

「ミリア……！」

口を開くとこぼこぼと泡が漏れ、くぐもった声が出た。それで今いる場所の違和感に気付く。動きに合わせて揺らめく視界に、想像よりも軽いミリアからの衝撃。理解が追いつかず呆然としていたら、ミリアが心配そうに顔を上げた。

「お兄ちゃん、だいじようぶ？ どこか痛い？」

「いや、大丈夫だよ、ミリア。ちょっと混乱してるけど。ミリアこそ大丈夫？ おかしなところはない？」

「ない！ あのね、みんなが助けてくれたんだよ」

「みんな？」

「うん！ 呼んでくる！」

そう言うと、ミリアは僕が寝ているベッドの端を蹴ってドアの先へと泳ぐようにして消えた。本当にここはどうなっているのだろうか。ミリアの様子を見ている限り、危険は無さそうだから一旦状況把握に努める。上半身を起こして腕を動かすと柔らかな抵抗を感じる。どうやらここは水の中なのだろう。なぜ呼吸ができてるのは分からないが。

部屋の中には、繊細な彫刻の彫られたローテーブルに柔らかなソファ、身長よりも高い本棚などがあって、まるで貴族の私室のようだ。実際に見たことがある訳では無いからあくまで想像だが、高級そうな家具が並んでいるという意味では間違っていないだろう。今いるベッドも一人で寝るには広すぎるくらいだ。

家具があるのと反対側を見ると、大きな窓があった。ここがどこなのか確認したい。そっとベッドから立ち上がり、抵抗を感じつつ窓辺に歩み寄る。

「な、んだ、これは」

木の板を組み合わせて作られた家。大きさも形

もバラバラなそれらが、梯子や棒が繋がれて浮いている。その間を優雅に泳いで行き来する人々。地面は耕され何か分からない植物が植えられている。

見たこともない世界に釘付けになっていると、コンコンとドアをノックする音が響いた。中に入ってきたのは、優しいおじいさんとおばあさん、二人と手を繋いで引つ張っているミリアだった。

「お兄ちゃん、ミリアたちを助けてくれた、おじいちゃんとおばあちゃんだよ」

「えっと、初めまして。アルテミリアの兄の、ライオネルです。あの、あなたたちは……」

「わしはバナロック・テ・フェミアだ。こっちはわしの妻のテレシア・テ・フェミア。君の祖父と祖母だよ」

「は？」

「ちよつとあなた、急に言われても混乱してしまわうでしょ。ごめんなさいね、ライオネル。起きたばかりで聞きたいことも沢山あるでしょう。少しお話をしましょう？」

そう優しく提案したおばあさんの笑顔に酷く既視感を覚えたが、それが何なのかは思い出せなかった。

二人がけのふかふかのソファに僕とミリア、バナロックさんとテレシアさんがそれぞれ座って向き合う。テーブルには使用人らしき人が用意してくれた飲み物とお菓子が並べてある。ミリアは

嬉しそうに細い筒の刺さった丸い容器を手を取って筒から飲み物を吸っていた。きっと水中だからその工夫なのだろう。

「そうだね、何から聞きたいかな」

「じゃあ、まずここはどこなんですか？」

「ここはフェミア、湖の底に作られた王国だ」

「フェミアって、さっき……」

「ふふ、賢い子ね。ええ、バナロックはフェミアの国王を務めています」

豪華な部屋だとは思っていたが、まさか王族の住む建物だったとは。目の前で微笑んでいる二人は一つの国の頂点に立つ人たちなのだ。思わず緊張が背筋が伸びる。

「そう固くならなくていい。わしらは家族なんだからな」

「そうよ。気軽におばあちゃんと呼んでちょうだい」

「家族……。さっきから言ってる、あなたたちが僕らの祖父母っていうのは、本当なんですか？」

「本当だよ。君たちの母ポリシアはわしとテレシアの娘なんだ」

懐かしそうな、だが、少し後悔も含んだ顔でバナロックさんは語ってくれた。

十二年前、フェミアには一人の王女がいた。

その王女は、明るく奔放、好奇心旺盛で優しい性格から多くの国民に愛されていた。誰もが、王女がいつか王位を継ぎ、女王となってフェミアを治めていくのだろうと期待していた。

ある時、王女は教育係の目を盗んで湖の上の方を泳いでいた。そこである人間の男と出会ったのだ。彼は小舟で釣りをしようとして漕ぎ出したのはいいものの、操作に慣れておらず船をひっくり返して溺れてしまったのだそうだ。沈みゆく体にもうダメだと諦めかけた時、岸边まで泳いで引張ってくれたのが王女だった。

好奇心旺盛な王女は地上の生活に興味を持ち、男は助けってもらったお礼に色々なことを話して聞かせた。幾度も会っているうちに、二人が惹かれあつたのは必然だったのかもしれない。

しかし、王女は女王になることを望まれていたし、男は水中で生活することは出来ない。フェミアの王は王女が居なくなってしまうことを恐れ、王女を閉じ込めようとした。だが、幼い頃から奔放に生きてきた王女を止めることなど出来るわけがなかったのだ。王女は王国から逃げ出し、地上の男のもとへ行ってから行方知らずとなっていたのだった。

「その逃げ出した王女というのが、君たちの母ポリシアだよ」

「そんな……。でも、母さんからも父さんからも、一言もそんなこと言われたことありませんでした。本当に僕らの母さんがその王女様で間違いないんですか？」

「ええ、あなたたちのその瞳が何よりの証拠よ」
思わず隣に座るミリアを見る。どうやらミリアもちゃんと話は聞いていたようで、同じタイミングで僕のことを見た。その瞳は深い水の底のような澄んだ青と、若葉のような柔らかい翠が混ざった不思議な色合いをしている。ミリアより翠の成分が強いが、僕も同じように二色の色水が混ざったような色のはずだ。

「フェミアの民は両親の瞳の色を両方受け継ぐことが多いんだ。お父さんとお母さんの色それぞれが水のように混ざり合う。まさに君たちのようにね」

「水は形を持たない。だから何とでも合わさることが出来る。あなたたちの瞳の青はポリシアの瞳の真ん中の色とそっくりだわ」

まさか瞳の色にそんな理由があつたとは。ずっと不思議な色合いだとは思っていた。母さんと似ているこの瞳が元から好きだったが、これが繋がり証と言われれば余計に嬉しくなる。

「ねえねえ、どういふこと？」

「つまり、わしらは君たちの血の繋がった本当のおじいちゃんとおばあちゃんだということだよ」

「家族が増えたってことだね！ やった！」

ミリアの無邪気な声に段々と実感が湧いてくる。この人たちは一国の王様だけど僕たちの家族で、溺れていたところを助けてくれたんだ。安心したのかお腹がぐーっと鳴る。

「ふふ、ずっと寝ていたんだもの。お腹も空くわよね。すぐに準備させましょう」

「そうだな。食べながらいいから、ライオネルたちがどうしてここに来ることになったかを教え

てくれるか？」

「うん。わかった、おじいちゃん」

その後、おじいちゃんたちについて別の建物へと移動することになった。王族の居住区は、食堂、私室、客室、リビングに分かれていて、それぞれ別の建物らしい。

ちなみに一つ一つの浮いている建物のことをジマールと呼ぶらしい。話をしていたジマールから食堂用ジマールへと泳いで移動する。机に並んだ沢山の料理を食べながら、僕らに起こった出来事を語った。

「僕たちは攫われて奴隷にされそうになったんだ。いつも通り家でミリアと二人で母さんたちの帰りを待ってた。けど、その日は二人とも遅くって、仕方ないから先に寝ようとしてたんだ。」

そしたら突然ドアを開ける音がした。母さんたちだと思って廊下に出たら、そこにいたのは知らない男たちで。逃げようとしたけど捕まっちゃって荷車に入れられたんだ。でもそこに他の人はいなくて見張りもいなかったから、ミリアと二人でどうにか逃げ出した。

すぐに気付かれて、追いかけてる時に大きな湖の前に出て。大人なら追ってこれないかもしれないって思って、湖の上に逃げた。なんとか男たちは撒けたけどそこで氷が割れちゃって……。気を失った後おじいちゃんたちに助けられたんだと思う」

僕の拙い話を二人は黙って聞いてくれた。部屋

に沈黙が落ちる。なんとと言われるか分からなくて、自然と手は止まり、俯いていく。額が机に着きそうになった時、正面でカタンと音がした。次に頭に感じる重み。

「よく、頑張ったな」

「二人とも、生きてここまで来てくれてありがとう」

ミリアごと後ろから抱きしめられる。その水温と違う温かさに思わず目頭が熱くなり、ついには耐えきれなかった涙が溢れ出す。優しくおじいちゃんが頭を撫でてくれる。これまで隠していた恐怖や不安が溢れ出して、すっと消えていくような気がした。

近くで人の動く気配がして、意識が浮上する。きつと母さんが僕たちの顔を見に来たんだろう。母さんは気づいてないだろうけど、僕は時々早く目が覚めた時は、母さんが部屋に来てくれるのを楽しみにしてるんだ。ミリアがいつも起きる時間だと母さんと父さんはミリアに付きっきりになっちゃうから、これは僕だけの秘密。まあ、やっぱり眠くて二人が出て行った後また寝ちゃうのだけだ。

「んん」

「あら、ライオネル様、起こしてしまいましたか。まだ寝ていて良いですよ」

想像と違う知らない声が聞こえて、慌てて飛び

起きる。ベッドの傍に居たのはメイド服を着こなした、母さんと同じくらいの歳の女の人だった。最近母さんが部屋に来ることもなくなっていたことを思い出す。

「あなたは？」

「おはようございます、ライオネル様。私はこのジマール担当の侍女、ナタリーと申します。よろしくお願ひします」

「えっと、よろしくお願ひします。ライオネルです」

ナタリーさんに聞いたところによると、僕はあの後泣き疲れてそのまま眠ってしまったらしい。ミリアもいつの間にか寝ていたのでその場でお開きとなったそうだ。

「ナタリーさん、おじいちゃんに会うことって出来ますか？ ミリアが起きる前に話したいことがあって。あと、僕に様なんて付けないでくれると嬉しいです。敬語だっていいです。なんか恥ずかしいので」

「あら、そうですか？ では坊ちゃんと呼ばせて頂きますね。敬語は癖になってるので大丈夫ですよ。陛下は、今は執務室にいらつしやるはずですので、ご案内致します」

「うん、ありがとう、ナタリー」

ナタリーについてジマールの外に出る。ジマールの外を泳ぐのは二度目だが、行き先と時間が違うから随分と雰囲気違って見えた。ジマールのない広い空間には代わりに屋台が所狭しと並

び、食べ物から雑貨まで色々なものが売られ、大勢の人が楽しそうに買い物をしていた。

「すごい人だね。まるでキラキラ光る砂みたいだ。とても綺麗だ」

「ふふ、やはり親子ですね。ポリシア様も昔、市場の様子を見て同じように仰っていました」

「母さんのこと知ってるの?」

「はい。実は私の母もフェミア家の侍女をしていますが。私も幼い頃から連れられて王族用ジマールを出入りしていたのです。その時に一緒に遊んだのがポリシア様です。」

突然いなくなった時は驚きましたが、ポリシア様らしいとも思いました。そして、その息子である坊ちゃんに会えて、とても嬉しく思います」

母さんのことを語るナタリーはとても楽しそうで、息子の僕よりもよほど母さんに詳しいのだろうと思えた。それから執務室に着くまでの間、ナタリーは母さんの話を沢山教えてくれた。だから、だろうか。思わずこんな言葉がぼろりと零れたのは。

「母さんは、父さんと結婚したこと、後悔してるのかな?」

「……なぜそう思われたのですか?」

「だって、母さんは寝る時以外家に帰ってこないし。家に帰ってきて、一言話したらすぐに寝ちゃうんだ。父さんと仲良さそうに話してるところもほとんど見たことない」

「ミリアなんてまだ小さいのに一緒に遊んだこと

もないんだよ? 昔はもつと一緒に遊んだり、笑いあったりしてたのに。」

攫われた日に母さんたちが帰ってこなかったのは、母さんたちが僕らを売ったからなんじゃ——」

「それはありません。私の知るポリシア様はそういったことをする方ではありません」

僕の言葉を遮って、ナタリーが凛とした声で断言した。おじいちゃんの執務室のあるジマールに入ったところ、ちょうど部屋の前廊下でナタリーが立ち止まる。

そのままドアをノックするのかもしれないや、ナタリーは僕の前に膝をついて向き合った。僕とナタリーの視線が揃う。

「私は坊ちゃんのお父上にお会いしたことはございませんが、ポリシア様からお話を伺ったことがあります。お父上のことを語るポリシア様は本当に幸せそうな優しい表情をしてらっしゃいました。」

それに、ポリシア様は見ず知らずの国民ですら愛し、慈しんでくださった方です。坊っちゃんやアルテミリア様のことを愛していないわけがございません」

「そっか……」

「はい。ですが、ポリシア様が坊ちゃんを不安にさせているのも事実。これは昔のように私が説教をしなくてはなりませんね」

「ナタリー?」

「なので、坊ちゃん。ポリシア様に会いに行かれ

る時は、私も連れて行って頂けますでしょうか?」

悪戯な笑顔で放たれたナタリーの言葉でようやく気が付く。ナタリーは、僕が何に迷っていて、何が不安なのかを理解した上で、僕のことを助けると言ってくれているのだ。僕が気にしないように、違う理由を添えて。その気遣いに胸が温かくなる。

「ありがとう、ナタリー」

「何のことでしょう? では、そろそろアルテミリア様も起きられるかもしれませんので、その前に陛下とお話をしましょう」

「うん」

ナタリーに促されて、執務室のドアをノックする。おじいちゃんの返事が聞こえたので部屋に入ると、おじいちゃんが笑顔で出迎えてくれた。

入って正面の奥に執務用の机があり、その手前に応接用のローテーブルが置いてある。おじいちゃんは奥側のソファに座り、僕にも座るよう手で示す。

「おはよう、ライオネル。昨日はよく寝れたかい?」

「おはよう、おじいちゃん。うん、あんな柔らかいベッドで寝たのは初めてだったから、寝覚めが良くてびっくりしちゃった」

「それは良かった。それで、わしになにか話があったて来たんだらう? ゆっくりでいいから話してごらん」

「……僕、家に帰ろうと思うんだ」

「家というのは地上のだね。帰るのはもちろん構

わななければ理由を教えてくださいるかな」
「僕、湖に落ちる前、もしかして母さんたちは僕らのことを売ったのかもしれないって怖かったんだ。」

母さんたちは家にいる時間がすごく短くて、ほとんどの時間を僕たちは二人で過ごしてた。それに、お金もあんまりないんだと思う。だから、お金をもらう代わりに僕らが奴隷にされそうになったんじゃないかって。

だから、ここで目が覚めておじいちゃんたちと話したら、ずっとここにいた方がいいんだろうって思った。ここは、温かいから寒さに凍えることもないし、地上の知識を活かせばお金も稼げると思う。何より、おじいちゃんたち家族がいる。ミアを一人にさせることもない。

でも、僕、おじいちゃんやおばあちゃん、ナタリーと話していると考えちゃうんだ。ここに母さんや父さんがいたら、昔みたいにまた笑ってくれるのかなって」

「ライオネル……」

いつの間にかおじいちゃんは僕の隣に来ていて、また昨日のように頭をゆっくり撫でてくれる。そのしわがれた手の平は、全く違うのに何故だか父さんの手を思い出して。同時に、ふとおばあちゃんや父さんが頭に浮かんだ。あの時、見覚えがあったのは母さんの似たような表情を見たことがあったからだと思付く。

ミアアが生まれて間もない頃、もう記憶も臆気になってしまったが、僕たちが『家族』だった時

が確かにあったのだ。なぜ変わってしまったのか、僕には分からない。だからこそ、きちんと母さんたちと話をしたいと思う。

「ライオネル、君のしたいようにしなさい。そして、どんな結果になったとしても、ここフェミアにも居場所があるということを忘れないでください」

「ありがとう、おじいちゃん！」

それからトントン拍子に話は進み、ミアアをフェミアに残して僕は家に帰ることになった。ナタリーを連れて湖の外へと出る。外は相変わらず雪で覆われていて、とても静かだった。

「フェミアはあんな膜で覆われてたんだね」

「あの膜のおかげで冬でも温かく保てるのですよ」

ナタリーと他愛もない話をしながら、林の中を歩く。男たちに捕まってから直ぐに逃げ出したから、家まではあつという間に着いた。

村から少し離れた場所に建つ、質素な家。銀色の世界の中にぼつんと存在するそれが、僕が生まれ育った家だ。いつもと変わらない笑顔で領いてくれるナタリーに励まされて、一步一步を踏みしめるように歩いていく。家まであと十歩まで近づいた時、唐突にドアが内側から開かれた。ドアの内側にいたのは、青と紺の瞳の女の人と翠の瞳の男の人だ。

「母さん、父さん」

「ライオネル！」

二人が外に立っている僕のこと気付く。する

と、二人は走りよってきて思いつき僕を抱きしめた。

「ライオネル、ライオネル。ああ良かった、本当にライオネルなのね」

「本当に、本当に良かった。ありがとう」

「ねえ、ライオネル。怪我は無い？ 私たちが居ない間に何があったの？ ミリアはどこ？ 無事なの？」

「ポリシア様、息子の無事を知れて安心したのは分かりますが、そんな一気には答えられませんよ。それに坊ちゃんが窒息しそうです」

後ろから追いついたナタリーが呆れた顔で注意してくれる。

その声に、母さんがハッと顔を上げる。

「あなた、ナタリーなの？ なんでフェミアの民であるあなたがここに」

「ポリシア様に説教するためですよ」

「ナタリーは僕に付いてきてくれたんだよ」

「そうか、ライオネルを助けて下さったのですね。ありがとうございます。何もございませんが、ここでは冷えますし家の中へどうぞ」

父さんの言葉で、ここが雪の中であることを思い出す。急に寒くなった気がして体をふるわすと、母さんと父さんが手を握ってくれる。両手に温もりを感じながら、僕は我が家へと帰ったのだ。ただいま」

「わあ、湖の底はこんな風になっていたのか！」

フェミーアの水中を、全身が金属の鎧のようなもので覆われた奇妙な格好の男が泳いでいる。なぜ、全身が覆い隠されているのに男だとわかるかと言うと、あの男は僕の父さんだからだ。どうやらあの鎧を身につけて、背中に背負っている箱に空気を溜めておくことで、水中で活動できるようにしているらしい。

「お父さん、早く！ あつちにすごい綺麗な女神様の像があるんだよ」

「ミリア、待ってくれ。僕は泳ぐのが得意じゃないんだよ」

ミリアが父さんの手を引っ張って行こうとするが、足を踏ん張ることが出来ないため、なかなか思うように進まないようだ。父さんが不格好ながら、足を動かして少しずつ進んでいた。

騒がしい二人の後ろを、母さんとゆっくり泳ぎながら行っていく。母さんは父さんと結婚するまでフェミーアに住んでいたから、もちろん泳ぐのが上手い。地上では何も無い場所がよく転ぶくらい抜けてるところがあったので、少し驚いた。

「ふふ、あの人のあいうところ、本当に変わってないわね」

「そうなの？」

「ええ。私たちが出会ったきっかけは、あの人が溺れかけていたのを私が助けたことなのよ。あの人は泳げもしないのに、一人で船に乗っていたの。その時研究していたことの為に魚が必要だったのですって」

「研究熱心だったんだね」

そうね、と母さんが小さく呟く。母さんの顔を見上げると、罪悪感の滲んだ表情で遠くを見つめていた。きっと、僕とミリアを放置してしまったことを後悔しているのだろうか。

僕が我が家に帰ったあの日、僕らはこれまでのことをお互いに話しあった。そこで知ったのは、父さんは水中で活動するための研究をしていて、母さんはその資金を集めるために毎日働いていたということ。

母さんと結婚した時父さんは、母さんから故郷を奪ってしまったのではないかと悩んでいたらしい。父さんが水中で生活できないから、母さんは故郷を離れて暮らすことになってしまった。自分がフェミーアに行くことが出来れば、母さんは実の親から逃げる必要はなかったと考えたのだ。僕とミリアが生まれたことで、僕らにおじいちゃんとおばあちゃんとおわせてあげたいという願いもできた。

だから、水中で活動する方法をみつけるため、研究を始めた。母さんも、僕たちにフェミーアを見せたいと思っていたから、できる限り支えることにした。前例のないことで行き詰まることも多く、研究に集中するあまり、段々と家族と接する時間が減っていつってしまったのだそうだ。研究には多くのお金が必要なので、母さんも一日中働かなくてはならなかった。

「本当にあなたたちには悪いことをしたと思ってるわ」

「家にいなかったことなら、もういいよ。確かに」

寂しい時もあったけど、今こうやって、皆でフェミーアに来て良かったと思うから」

父さんの努力は実り、水中で過ごす方法を開発できたのだ。今はまだ短時間しか過ごせないし、不格好ではあるが、おかげで僕たちの『家族』は揃うことが出来た。その事が、僕は何よりも嬉しい。

「それだけじゃないわ。日中家に子どもしかいないことがばれたせいで、二人が賊に狙われて、怖い思いをさせてしまった」

「じゃあ、今度家に大きな鍵を付けようよ。それか、父さんのあの鎧を置いておいたら、びっくりして賊も逃げるんじゃないかな？」

少しおどけた調子で言う。いつまでも暗いままなんて嫌だ。色々あったが、今が幸せだと思えるのだからそれで良いのだ。

「ふふ、そうね。……ありがとう、ライオネル」
「どういたしまして」

「お兄ちゃん、お母さん、何してるの？ 次はあっち行くよー」

「こら、ミリア！ 一人で行くんじゃない！」

「ほら、行こう。母さん」

「ええ、行きましようか」

『家族』を繋いでくれたフェミーアの水が、僕らの間をとて美しく揺らめいていた。